

お蔭様で、本学会としても 20 周年という節目を飾り、此のオーガナイズドセッションも開催出来、学会設立 20 年で始めて『学会設立の経緯や詳細』を振り返り、『本学会の存在意義』を語り合えた。

次の 20 年 40 年に向けてマイルストーンを打ち込めたことを、深く感謝したい。

本学会は『産・学連携を代表格とする異種異質連携により、新しい何かを産み出すこと』を基本原理として、産み出したものを知の形で捉え直し、産み出した新しい知を整理し体系化し構造化理論化へと向かうことで、多様な社会貢献実装を標榜した学会であるが、今に至るまで必ずしもその存在意義は全ての学会員に共有されている訳ではなく、特に『産学連携』草創期の、停滞を続ける我が国の大学や社会（その産業・経済・学術・文化活動等）を変革しようという強い熱意の高まりを知る機会の無かった若い方々に、此の連携・融合方法論の本質を共有した上での本学会の存在意義を、もう一度訴え直して共有して戴くことは大変重要であったと思われる。

パネルやコメンテーターも挙って、そうした次へのアクションを浮彫りにして戴いた点では、本 O S は大変貴重な、且つ起爆的な意義もあったと思う。その中には、20 周年を迎えてもう一度、例えば本学会名称『産学連携学会』はそのままで良いのかという疑問がパネルやコメンテーターの一部からも発言され、一方で本 O S では十分論じ得なかった『学』としての存在意義や体系化構造化理論化、拡大するフィールド（学問領域）の再定義など、（学術委員会他の然るべき部署にバトンを渡す前に）此の O S の一つの結実として整理をしておく必要を強く感じた次第である。

学会の再定義は、結果として名称の変更に結び付くかも知れず、それ以上に屋台骨を揺るがす大変換ではあるが、20 年の節目というのは、そういう貴重な機会でもあると思われる。

出来なかった言い訳は沢山あるが、20 年の節目に変革の種を学会活動の基幹にしっかり組み込むために、未来に向けて本 O S のエッセンスを記録し報告しておきたい。これを踏み台にして新しい一歩を考えたいし、どうやら各所で、その準備はもう出来ているようである。

もう一つ、20 年来の『産学連携学』の課題がある。前言にも関係して名称等の改変改革は今後の議論に委ねられるが、大学での『（仮称）産学連携学科・同大学院専攻』の設置もその一つである。モデレーターである湯本はかつて勤務していた K 大学で、強く希望して『産学連携知的財産特論』という大学院講義を提案・担当し、此の科目の創設と内容が極めて高い評価を受けたので、次の目標として斯うした内容を所掌する講座の創設、少なくともその萌芽のようなものを目指したが、これは国立大学の教員定員漸減方針と既存分野の激しい生残り競争の中ではとんでもないことであった。従来から在る講座・分野も時代変化の中でその存続・生残りに汲々としており、新しいものを入れる余地は全く無いことは直ぐ解った。しかも国立大学総定員削減の速度は思うよりも急で、しかも国立大学一律での実施に学内は騒然となり、『（仮）産学連携学』講座の創設は夢のまた夢となった。特に K 大学工学系では、『産学連携・知的財産』分野を講義科目としては幅広く採り入れており、研究教育のもう一つの成果・果実として、そも工学分野の成立ち上、得られた知の社会実装を担う部分・分野が工学部・工学研究科の一角には必須と思われるが、必ずしもそうはなっていない。学としては学科或いは大学院専攻を持ち、継続的な研究と教育体制を持ち、

人材育成を行って社会に送り出す機能を持たない限り、此の分野は継続しない。

と同時に『産学連携学』関係者にとっても、大学の一角に居場所を持つことは必須の生残り条件であると繰り返し述べて来た。これは工学に限らず医学でもまた他の分野でも、『社会実装』のための基本メカニズムを研究教育に内蔵させる構えは重要である。此の連携分野は本来、文理融合分野であろうが、特にモノを創ることを目指して我が国が学に昇華させた工学分野は、研究教育分野の新陳代謝・分野構成の再編以上に積極的に変更を採り入れて行くべきであり、一方で出来るだけ早く医学他の学術分野の一角からも同様の運動が沸き起こり、それにより我が国社会が変わって行くことを望みたいと思うが如何であろうか？

【20周年記念オーガナイズドセッション『産学連携・異種異質連携を再考する』概要】

1. 期日：2023年6月13日 AM10:15～12:30（第2日午前）
2. 場所：高知会館 A会場
3. 次第：①主旨説明
②ショートレクチュア（SL）の部
③SLを踏まえた討論の部
4. 予稿：ショートレクチュア用A4*2頁以内
5. SL発表時間：主発表8分・質疑4分（5人予定=60分）
6. 討論時間：2テーマ×30分=60分

（登壇者）本学会・会長経験者から出席可能者

＝石塚悟史・木村雅和・小野浩幸・伊藤正実・湯本長伯

（コメンテーター）北村寿宏（学術誌委員長）・内島典子（広報委員長）

・伊藤慎一（本会副会長）

※第1部 ショートレクチャーの部 会長経験者

第2部 ディスカッションの部 講演者・コメンテーター・フロア参加者

※此のオーガナイズドセッションのまとめは、本学会誌でも詳細に報告される予定です。

※※以上、本学会高知大会・設立20周年記念オーガナイズドセッションにつきご報告でした※※

※学会誌次号は年末以降の発刊予定です。（電子出版）

※関係資料は別途学会HPにまとめて掲載しています。

文中のURLよりリンクができない場合は、以下のサイトよりご覧ください。

http://www.j-sip.org/os_kiroku.html

当メールニュースではイベントのお知らせや公募情報等、

産学連携に関する情報をお流しいたします。

会員の皆様への情報の配信をご希望の方は、

産学連携学会事務局（j-sangaku@j-sip.org）までご連絡ください。

バックナンバー：http://www.j-sip.org/mail_news.php